意味生成としての「スポーツ運動」体験の構造

久保 正秋

Masaaki Kubo: "Semantic generation" through experience of sports movements: A structural analysis. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 60: 617-633, December, 2015

Abstract : This study was conducted to examine the structure of "semantic generation" that occurs through experience of sports movements. First, by examining the body theory of Yuasa, we considered how, during the practice of sports movements, the body schema synchronizes with the body movements of others, the materials employed, and one's own body movements. Second, we analyzed the special experience of sports movements based on the model of triple cybernetics, arguing that synchronization of the body schema gives rise to the special experience. Finally, we discussed how this synchronization of the body schema during the practice of sports movements changes the relationship between one's self and the world.

The results of our study were as follows:

- 1) Yuasa argues that the relationship between mind and body has a double structure, i.e. a surface structure and a basal structure, the former belonging to the area of consciousness, and the latter to the area of unconsciousness. He points out that a sort of body schema exists in the basal structure, and argues that subliminal action through the body schema occurs prior to consciousness.
- 2) In the practice of sports movements, the body schema synchronizes with the body movements of others. When batting in baseball, the batter synchronizes with the movement of the pitcher. When dancing in a pair, one dancer synchronizes with the movement of the other. Similarly, the body schema synchronizes with materials such as a ball, a bat, and so on. In tennis, the player synchronizes with the ball in order to hit it. And the body schema synchronizes with the individual's own body. When performing floor exercises, the gymnast synchronizes the body schema with the objective and physiological body.
- 3) Based on the model of triple cybernetics, the special experience of sports movements allows transcendence from the social system to the eco-system. The world consists of personal, social and eco (nature) systems. In the practice of sports movements, synchronization of the body schema arises at this level of the personal system so that it can lead into the eco-system.
- 4) This special experience in the practice of sports movements changes the relationship between one's self and the world. We are usually conscious of the existence of others as "Es" in the social system. However, in the eco-system individuals are conscious of the existence of others as "Du". In this way, there is a change in the relationship between one's self and the world. This is "semantic generation" through experience of sports movements.

Key words : body schema, unconsciousness, synchronization

キーワード : 身体図式, 無意識, 同調

1. はじめに

体育・スポーツ研究の領域で身体運動における意味生成論が展開されるようになったきっかけは、1998年に開催された第49回日本体育学会体育原理専門分科会シンポジウムにおける矢野智司の発表である。矢野はそこで、学校教育が「発達の論理」と「有用性の原理」に支配され、身体運動がいつも何かの手段として把握され、評価されている現状を批判している。さらに矢野は村野四郎の詩「鉄棒」(村野, 1939)を手掛かりに、そのクルッと回る体験を取り上げ、「おお」とか「ああ」としか言い表せない瞬間は非知の体験であり、私と世界との間の境界線が消えていく「溶解体験」であるとしている。そして矢野は、それが有用性の原理と「発達の論理」を超越した意味生成の体験であるという(矢野, 1999)。

久保は、この矢野の意味生成の理論を「体育における人間形成」を論じる際に検討し、身体教育において「形成」とは異なる「生成」の次元を設定することの必要性を論じ(久保, 2006)、「生成」の次元の教育は、近代的「教授」—「学習」モデルでは直接的に成し遂げることは困難であることを指摘し(久保, 2009a)、それに代わるモデルとして、指導者と子どもたちが「相互性」を有する「教育的身体空間」の構成を主張している(久保, 2010)。また久保は、スポーツを構成している「スポーツ運動」を取り上げ、「ボールを打つ」という「スポーツ運動」自体のその瞬間に、

重要な意味生成の体験があると論じ(久保, 2009b, pp. 183–196.)、そこにおける時間性の問題を検討している(久保, 2013)^{注1)}。

しかしながら、「スポーツ運動」において生起する、矢野が指摘した鉄棒でクルッと回る「おお」とか「ああ」としか言い表せない瞬間の体験、久保のいう「テニスのストロークでボールを打った瞬間」の言葉にできない体験(久保, 2013, p. 250)と例示される「溶解体験」は経験的に納得できるものであるが、それがどのような体験であるのかは明確でない。それが故に、この体験がどのようなしくみで意味を生成するのか、その構造も不明確なままに論議が進んでいるのである。そこで本研究は「スポーツ運動」において生起する「溶解体験」とは何であるかを明らかにし、そしてその「スポーツ運動」体験がどのようにして意味の生成へとつながっていくのか、その構造を明らかにすることを試みるものである。

「溶解体験」は矢野が指摘するように「非知の体験」であり、身体の「無意識」の領域にかかわると考えられる。よって本研究はまず、身体の「無意識」の領域を論じた湯浅の「身体論」を取り上げ、その身体の「無意識」の領域において、何らかの運動性の図式が存在することを論じる。次に「スポーツ運動」において、その無意識下における運動性の図式が「他者の身体」「もの」「自己の身体」と同調的に感応(共鳴)するという事態を記述する。さらに、「スポーツ運動」において生起する「溶解体験」をベイトソンの三重のサイバネティックモデルに基づいて検討し、「スポーツ運動」における同調的感応が「溶解体験」を生起させることを論じる。本研究は最終的に、「スポーツ運動」における同調的感応によって生起した「溶解体験」が「世界」との関係性を変容させることを論じる。そしてこの関係性の変容によって自己の在り方が変わるという処に「スポーツ運動」体験の意味生成の構造と生成される「意味」を見出すことを試みるものである。

図 三重のサイバネティックモデルに基づいた「溶解体験」

2. 湯浅の身体論

1) 身心関係の二重構造

湯浅はその「身体論」^{注2)}の中で、身心関係の二重構造について述べている。湯浅はまず、意思の自由に従う「四肢」を支配している「体性神経（中枢は大脳皮質）」と意思から独立した「内臓」を支配している「自律神経（中枢は皮質下中枢）」の存在を指摘し、それを「身体の二重構造」と呼ぶ（湯浅, 1977, p. 244）。さらに「感覚（外界感覚）」と「思考」の作用であるところの「意識」の領域、そして「感情」、「情動」の作用が重要である「無意識」の領域を設定し、それを「心の二重構造」と呼ぶ。そしてこれらの二重構造を合わせることによって「身心関係の二重構造」を設定する。それは大脳皮質に中枢をおく「表層的構造」とその根底にある「基底構造」の2つである（湯浅, 1977, p. 251）。

「表層的構造」は「意識」の主要部分であり、それは身体と外界の関係に関する情報システムであるところの「外界感覚—運動回路」と、身体の状態そのものについての内部情報装置である「全身内部感覚回路」からなる（湯浅, 1986, pp. 71–72）。「外界感覚—運動回路」は「感覚神経（求心的）」—「運動神経（遠心的）」システムであり、湯浅はベルクソンの「感覚—運動機構」、メルロー・ポンティの「感覚—運動回路」と同様な外界にかかわる行動のために習慣化した情報システムであるとする（湯浅, 1986, p. 72）。つまり、感覚神経によって外界からの刺激を受け取り、運動神経のはたらきによって身体が外界の状況に対応した行動をとるというシステムである。「全身内部感覚回路」は運動に関する情報装置と内臓感覚神経からなる。前者は運動感覚（キネステシス：kinesthesia）に関する回路であり、先の「外界感覚—運動回路」を支えている情報メカニズムである（湯浅, 1986, p. 74）。後者は体性内部感覚（ソメステシス：somesesthesia）の回路であり、内臓に関する情報を脳に送る回路である。この2つの回路によって全身内部感覚（セネステー

シス：coenesesthesia）の回路が構成され、人間はこの自動制御（フィードバック）装置によって自分の身体の状態を感じることができる。湯浅はその意識を「身体の自己把握の意識」、「身体についての気づき」と呼んでいる。さらに湯浅は、この「表層的構造」は「明るい意識（明るい判別的意識：湯浅, 1990）」を通じて自己と世界を関係づけるものであり（湯浅, 1977, p. 66）, 「日常的経験の場における『世界内存在』としての人間の存在様式の表層を形成している（湯浅, 1977, p. 251）」と述べている。

そして湯浅は、この「表層的構造」の根底に「基底構造」を設定する。それは、感情という形で意識のレベルにその一部があらわれているが、大部分が無意識領域に沈んでおり、「明るい意識」の底にかくれた「暗い意識」（暗い原始的意識）を形成している。「表層的構造」が意識の領域であるとすればこの「基底構造」は無意識の領域として設定される。これは湯浅のいうところの身体の3番目の回路である「情動—本能回路」に対応している（①「外界感覚—運動回路」、②「全身内部感覚回路」：前出、③「情動—本能回路」）。この回路は自律神経に関する回路であり、生命の維持に基本的なものである。自律神経は交感神経と副交感神経とに分かれ、この2つのはたらきによって緊張と弛緩のバランスが保たれる。またその求心性回路によって内臓の状態情報を脳へ（皮質まで達していないので内臓の活動が無意識下で行われる）、遠心性回路によって感覚器官からの刺激を情動的反応（快不快の感情＝ストレス情報）に変換して内臓器官に送っている。①「外界感覚—運動回路」と②「全身内部感覚回路」の中枢が大脳皮質であるのに対して、この③「情動—本能回路」の中枢は、古い皮質である大脳辺縁系下部の脳幹にあり、情動と深く関係するという（湯浅, 1986, p. 79）。情動の発生場所はその間脳の視床下部であり、自律神経は皮質まで達していない。よって、意識における感覚と思考が身体の特定の部位に局所化されて結びついているのに対して感情（情動）は、怒りや悲しみのように全身的なものであり、ホリスティックなもの

であるという。湯浅はこの「基底の構造」について次のように述べている。

哲学的に見れば、日常経験の場における「世界内存在」の存在様式においては、この身心関係の基底の構造は明確な姿を現さない。なぜなら人間は、日常的経験の次元においては、心が身体を支配しているという意識の自由の確信にもとづいて、世界の事物に対する配慮的交渉に没頭しているからである(湯浅, 1977, p.252)。

2) 身心関係の日常的理解の逆転

湯浅は次に、この身心の「表層的構造」における生理学的な「外界感覚—運動回路」のはたらきの底に生理学的経路とは逆方向の作用が潜在することを指摘する。そのために湯浅はベルクソンの「運動図式」、メルロー・ポンティの「身体図式」を取り上げる。湯浅は、ベルクソンの「運動図式」^{註3)}を「無意識レベルにおいて身体が世界に対して行動すべく身がまえるはたらき(湯浅, 1977, p. 266)」を意味すると解釈する。そして、この「運動図式」を介して身体は、知覚より先に無意識レベルにおいて行動を開始しており、それによって知覚は意味を与えられるとする。ここにおいて受動的知覚から現実的行動へという生理的次元のメカニズムとは逆の、潜在的行動から受動的知覚へという作用がはたらいているとする。さらに湯浅は、メルロー・ポンティの「身体図式」を次のように説明する。生理的身体の「外界感覚—運動回路」の底に運動性の「身体図式」をそなえた「習慣的身体」の層が潜在し、そこにおいて目標とする外界の事物に向かって潜在的に「実存的指向弓」が形成される。この「身体図式」の「実存的指向弓」は最初から行動の目標に到達しており、それによって「知覚」は意味をそなえた「現象学的」知覚となる(湯浅, 1977, p. 267)。メルロー・ポンティは「身体図式」を、心理学的な「連合説的定義をはみ出し」たものとして捉え、「単に習慣的な運動感覚の残滓たることをやめて、その構成法則となるのでなければならない」と述べる。そして「それは私の身体が現勢的

または可能的な或る任務に向かってとる姿勢として私にあらわれる」(メルロー・ポンティ, 1967a)とする。つまり湯浅の解釈に従えば、「身体図式から、意識に先立って、一定のインテンションをもった志向作用が外界の事物に向かって発射されている」ということであり、「主観にとっては意識に先立つ潜在的なはたらき、いわば無意識的なものであるとともに、対象としての『物』の状態を、感覚に先立って直感的に感知している作用」(湯浅, 1987, p. 8)である。ここに、先のベルクソンの「運動図式」と同様に、生理学的経路とは逆方向の作用が潜在するを見て取るのである。

しかしながら湯浅は、メルロー・ポンティがフッサール現象学からの強い影響を受けているが故に、無意識に関する十分な考察がないことを批判する(湯浅, 1986, p. 176; 湯浅, 1987, p. 9)。そして湯浅は、ベルクソンやメルロー・ポンティが仮定した「感覚—運動回路の底に働く運動性の図式」は「身心関係の基底の構造に即して考え直すべき」としている(湯浅, 1977, p. 271)。その後、湯浅は別の論考の中で「心理的=主体的身体」と「生理的=客観身体」という身体の二重性を示す概念を提示し、ベルクソンの「運動図式」(また、その考えを受け継いだメルロー・ポンティの「身体図式」)に関して「主体的身体が運動図式を通じて客観的身体のはたらきをコントロールし、方向付けているのだと考えた」(湯浅, 1997)ものとしている。

3) 湯浅の身体論が示唆するもの

「スポーツ運動」における「溶解体験」を検討する上で湯浅の身体論が示唆する点は、身体の「表層的構造」の根底に「基底の構造」があるということ。そしてその「基底の構造」において何らかの運動性の図式(運動図式/身体図式)が存在し、それを介して意識に先立つ無意識の潜在的なはたらき、すなわち「生理学的経路とは逆方向の作用」が生起しているということである。

山口はこの「意識に先立つ無意識的なはたらき」について、全ての意識には必ずそれと内容が

同じである無意識の感じや知覚や判断が生じているとし、そのことを「リベット値」で説明する。「リベット値」とは「意識は意識にのぼらない脳内活動の0.5秒の時間継続の後に生じる」というB. リベットの実験結果に基づくものであり、B. リベットの「意識の0.5秒の遅延説」といわれる(山口, 2012, p. 29). つまり、意識が生じるためには0.5秒かかるということである。山口は野球のバッティングを例にあげ、時速 150 km のボールは実際には見る(意識する)ことはできない(意識した時: 0.5秒後にはキャッチャーミットに収まっている)にもかかわらず、無意識にボールの運動が特定でき、球種を判別していることを指摘している(山口, 2008, p. 101)^{注4)}。我々は「スポーツ運動」の際に、例えばボールを意識(知覚)し、それに基づいて身体運動を生起させていると一般的に考えているが、(無意識レベルの)身体運動が先行し、その後、知覚や判断が生じているのである。つまりメルロー・ポンティの言葉を用いれば、ピッチャーの投球に対して(ボールの知覚以前に)「或る任務に向かってとる姿勢(身体図式)」が現れ、それがバッティングという「スポーツ運動」の「構成法則」となっていると言うことができる。150 km のスピードボールならずとも、「意識の0.5秒の遅延」が示す「意識に先立つ無意識の先行」は多くの「スポーツ運動」に見られる^{注5)}。そしてそこには「何らかの運動性の図式」が存在すると仮定することができる。

本研究は次に、具体的な「スポーツ運動」を例に取り上げ、この湯浅の身体論の検討によって示唆された知見に基づいて「スポーツ運動」における「何らかの運動性の図式」の働きを検討していく。ちなみに、この「何らかの運動性の図式」は本研究では「身体図式」と呼ぶこととする。

3. 「スポーツ運動」における「身体図式」の同調

1) 「身体図式」の「他者の身体」への同調的感応

例えばテニスで長いラリーが続くことがある。そしてその最中に特別な高揚感を感じることがある。外の世界は消え失せ、対戦相手とボール、そして自分自身の身体が織りなす特別な世界に入り込む。その情景を外からの視点で記述すると以下のようなになる。

「a のドライブに対して b はスライスで返球する。この攻防が何回も続く。突然、a はドロップショットを試みる。それに対応し b はダッシュし返球する。そしてまたラリーが続く」。

このように外からの視点で記述された情景において、先に論じた「身体図式」はどのような働きをするのであろうか。また、その「スポーツ運動」の実践者の内的体験としては、どのように記述することができるのであろうか。本研究はその「身体図式」の働きを明らかにするために、市川が主張する「身体図式」の「同調的感応」という働きに注目し検討を進める。

市川は、感覚を認識のためのものではなく行動のためのものとするベルクソンに注目し、「行動を遂行し、感情を体験するという身体の二重の能力」が知覚を支えているとしている(市川, 1986, p. 271)。そして「現実には生きている身体図式は、単に生理的レベルの図式ではなく」、「感覚」が「行動」とシステムをなす「感覚—運動図式」であると同時に「記憶」が「行動」とシステムをなす「観念—行動図式」であるとする。そして、この性格は「スポーツから舞踏や演劇までを含めた広義のパフォーミング・アーツを理解するうえで欠かせない視点」であると述べている(市川, 1986, p. 274)^{注6)}。さらに市川は、この身体図式の「同調的感応(共鳴現象あるいは共振現象ともいっていい)」という働きを指摘し、パ

フォーミング・アーツにおける感応的同調として、同型的同調（相手と同じ型の身体図式を形成する）と応答的・役割的同調（相手の行動に回答，2人以上のメンバーが共有の行動図式を維持しつつ協同的な場，あるいは敵対的・協同的な場で一定の役割を果たす）の2つの基本形を示している（市川，1986，p. 280）．そしてこの組み合わせによって現れる5つのタイプの例を示している．そのタイプとは①協調型，②誘導型，③対応型，④フェイント型，⑤自壊型である（市川，1986，pp. 281-283）^{注7)}．市川が述べるように，身体図式が他者のパフォーマンスと「同調的感応（共鳴）」という働きをするのであれば，先の「スポーツ運動」の外からの視点による記述は，その実践者の内的体験として，次のように記述することができる．

「aのドライブに対しbの身体図式は潜在的に感応し，応答的同調したパフォーマンス（スライスの返球）に入る．aとbの身体図式は互いに相手のパフォーマンスを潜在的にデッサンしつつそれに応答するパフォーマンスを現実化する（ラリーの応酬：③対応型同調的感応）．aの突然のドロップショットの試み（④フェイント型同調的感応の誘導）に対してbはダッシュし返球する（③対応型同調的感応）．そしてまたラリーが続く（③対応型同調的感応）」．

この記述の示すところは，aとbが，無意識のレベルにおいて，互いにその身体図式を相手のパフォーマンスに「同調的感応」していたことを示している．しかしラリーは突然終わる．「aのドライブがネットに当たり，ボールはbのコートにポトリと落ちる．bは動くことができない（⑤偶発的な自壊型同調的反応）」．先にドロップショット（フェイント）に対応することができたbは何故，動けなかったのか．それは，aのボールがネットに当たったことをbが意識（知覚）した時にはボールは既にコートに落ちていた（意識の0.5秒の遅延）のであり，aのパフォーマンスに対して，意識に先行して対応的に「同調的感

応」していたbはその偶発的な出来事に対応することができず，動くことができなかったのである．このように考えるとこのラリーは，外からの視点では，ボールを知覚し，それに対応したストロークの連続として見えるが，その「スポーツ運動」実践者の内的体験としては，意識に先立つ無意識の潜在的はたらきとして，身体図式が「他者の身体」へと連続的に「同調的感応」している事態なのである．

このような身体図式の「同調的感応」は他の「スポーツ運動」においても見ることができる．深澤らはサッカーを例に，パスを出すプレイヤーとそれを受けるプレイヤーの2人の間に「言葉によらない，身体運動を介したコミュニケーションが機能し，そこにパスコースの共有という意味が生まれてくる（深澤・石垣，2010，p. 107）」と述べている．深澤らはこのような体験を，「他者との関わりにおいて，自己の領域が他者へと拡大するような体験（「溶解体験」に対する作田のもう1つの概念である「拡大体験」：引用者）（深澤・石垣，2010，p. 107）」^{注8)}であるとみているが，これは2人のプレイヤーの互いの動きへの身体図式の同調的感応（役割的同調）がもたらしたものとも考えることもできる．また深澤らはマラソンの競り合いの場面を例にあげ，スパートを仕掛ける判断をする際の感覚を「あたかも相手ランナーの視点を我が身に引き写したかのごとき状態（深澤・石垣，2010，p. 108）」とし，それを拡大体験の1例としているが，これもまた，身体図式の同調的感応（応答的同調）とみることもできる^{注9)}．

2) 「身体図式」の「もの」への同調的感応

では，久保のいう「テニスのストロークで心地よいボールの弾みをラケットに感じる瞬間」というような「スポーツ運動」の内的体験（久保，2009a，p. 189）はどのようなものなのであろうか．これらは，先に示した身体図式の「他者の身体」への「同調的感応」という働きのみで説明することはできない．身体図式は「他者の身体」のみならずボールやラケットとも同調するという働

きがあるのではないだろうか。それを明らかにするために、ここでは佐藤が示した、身体図式（佐藤は「態勢」という言葉を使用している）が「もの」とも同調するという主張に基づいて検討を進める。

佐藤は「態勢」を「志向対象の対象種ごとに特有の迎え入れ方を生のかかわり方」であるとする（佐藤，2014，p. 143）。そしてメルロー・ポンティの「私の身体が現勢的または可能的な或る任務に向かってとる姿勢として私にあらわれる」という記述（本稿において先に引用した）を取り上げ、「態勢」は「行動の対象へと私がとる身体的なかかわりのあり方の自己把握」であり、メルロー・ポンティの身体図式は「態勢」を意味していると述べている（佐藤，2014，p. 136）。この佐藤の言う「態勢」も、本研究における「身体図式（何らかの運動性の図式）」と同様なものとして捉えることができる。

「態勢」は他者の「態勢」と共鳴（市川の同調的感応）すると同時に「もの」とも共鳴すると佐藤は述べている。その例として佐藤は、ピンポン玉を打つ時をあげ「ピンポン球の軌跡を見るだけでなく、ピンポン玉の動きのリズムに私は体のリズムを同調させる（正確に言えば態勢/身体図式を同調させる：引用者）」と述べ、これが共鳴であり、身体実践における有用性を持っているとしている（佐藤，2014，p. 169）。

このように、ボール等の「もの」に対する「スポーツ運動」、例えばテニスのストロークや野球のバッティングにおいては、その「打つ」という行動に先行し、それに志向した身体図式の働きが存在するのであり、その時それは「他者の身体」とともに、ボールという「もの」の動きにも同調していると考えられる^{注10}。このような事態は「スポーツ運動」に数多く見られ、先のテニスのラリーも身体図式が「他者の身体」と同時に、ボールへと同調し、それらが連続的に、複合的に生起しているものいえる。つまり、「aのドライブに対しbの『身体図式』は潜在的に感応し、応答的に同調したパフォーマンス（スライスの返球）に入る」と同時にボールの動きに同調（佐藤の共

鳴）していると考えることができる。先の山口が示した野球のバッティングの例も同様に、ピッチャーの投球に対して（ボールの知覚以前に）「或る任務に向かってとる姿勢（身体図式）」が現れ、それがバッティングという「スポーツ運動」の「構成法則」となると同時にボールに対して同調（共鳴）していると考えることができる。「スポーツ運動」において身体図式が同調するのは「ボール」のみではない。例えば、カヌーやボートの操作において、波によるローリング時にそれに同調的に対応し、身体を立て直している。サーフィンでは波の動きに同調的に対応している。あるいは、棒高跳びにおいては、ボールの「しなり」に同調的に対応し、身体を持ち上げている。さらには、新体操のように手具を用いる「スポーツ運動」では、そのロープ、フープ、ボール、クラブ、リボンとの同調的な対応が演技の中心的な課題となっている。このように「スポーツ運動」の実践において身体図式は「他者の身体」と同調的に感応すると同時に、「もの」とも同調していると考えられる。

3) 「身体図式」の「自己の身体」への同調的感応

しかしながら「身体図式」の同調的感応は、「他者の身体」やボールなどの「もの」に対してだけであろうか。例えば矢野のいう「鉄棒でクルッと回る瞬間」というような「スポーツ運動」の場合はどのように考えたらよいであろうか。鉄棒そのものと同調的に対応していると考えられるが、それだけなのであるか。

湯浅の身体論によって示唆された点は、身体の「表層的構造」の根底に「基底の構造」があるということ、そしてその「基底の構造」において何らかの運動性の図式（運動図式/身体図式/態勢）が存在し、それを介して意識に先立つ無意識の潜在的な作用が、すなわち「生理学的経路とは逆方向の作用」が生起するという点であった。「意識」の主要部分である「表層的構造」において「鉄棒でクルッと回る瞬間」は、湯浅の言葉をかりれば、身体と外界の関係に関する情報システム

であるところの「外界感覚—運動回路」と身体の状態そのものについての内部情報装置「全身内部感覚回路」によって自分の身体の状態を感じ、これによって身体が外界の状況に対応した行動（クルッと回る）をとると説明することができる。しかしながら、このような瞬間的な出来事は、知覚によって得た情報に基づいて身体を操作したとは考えがたい。何故ならば、B. リベットの示した「意識の0.5秒の遅延」が存在するのであり、意識したときにはその瞬間は過ぎ去っているからである。やはり「クルッと回る」瞬間には、「表層的構造」における知覚に先行した、「基底の構造」における何らかの身体図式が存在を認めざるを得ない。市川のいうように、「身体図式は元来、世界とかかわり、行動する図式（市川，1986，p. 280）」であり、また佐藤がいうように「態勢」が「行動の対象へと私がとる身体的なかかわりのあり方の自己把握（佐藤，2014，p. 136）」であるならば、根底の「基底の構造」において、これらの知覚（意識）より先に、身体（クルッと回る）行動を志向した身体図式が存在し、それによって行動を開始し、知覚（意識）に意味を与えているということができる。つまり身体図式は行動に志向しているのであり、その行動は「自己の身体」において実践される。通常身体運動では、この行動（運動）する実際の「身体」と身体図式は、例えば歩行のように、一致している。よって我々は、何も意識せずに歩くことができる。しかしながら「スポーツ運動」のような複雑で高度な身体運動（行動）の場合、それを志向した身体図式と実際の「身体」の間にズレが生じることがある。例えば鉄棒で「クルッと回れない」という事態は、その行動を志向した身体図式が未成熟の場合もあるが、身体図式と行動（運動）する実際の「身体」とが一致していない（ズレている）事態と考えることもできる。つまり、「クルッと回る」ためには、その行動を志向した身体図式が、自らの動きつつある「身体」と同調的に対応（一致）する必要があるのである^{注11)}。

樋口は「スポーツ運動」の実践において「主観—身体」と「客観—身体」の二重性が生起するこ

とを指摘している。この「主観—身体」とは運動感覚的知覚の担い手であり、「客観—身体」とは物理的・生物的構造によって制限された「客体的な存在」である（樋口，1987）。樋口は「スポーツをプレイする際、実践者は自らの身体的感覚を感じている。いわば身体が身体を感じるのだ。ここでは身体の二重性、両義性が生起している。そのような状況を分節化してみると、実践者は『主観—身体』と『客観—身体』とを持っていると考えることができるであろう」（樋口，1994）と述べ、身体二重性を論じる。そしてスポーツの実践者は「身体二重性による分裂を体験」し、「主観—身体」と「客観—身体」の間に運動感覚的な体験が生じる」のであり、それがスポーツの美的体験であるとする。さらに樋口はこの「主観—身体」が精神と関係し、「客観—身体」が自然界と連続しているという（樋口，1994）。この樋口のいう「主観—身体」と「客観—身体」の間に生じるのが身体図式と「客観—身体」との同調（一致）であり、それが「運動感覚的な体験」であり、美的体験をもたらすと考えられることができる^{注12)}。

あるいは田中は、湯浅の2つの身体概念、すなわち「生理的＝客観的身体」と「心理的＝主観的身体」を示し、幻肢や身体失認のような現象は2つの身体がうまく重なり合っていない状態であるとしている（田中，2009，pp. 5-6）。そしてこの「心理的身体」の一定の側面が身体図式であり、その意識下における正常な働きによって我々は日常の行動をしているという。そしてその「行動にとって必要十分な身体各部位のコーディネーションの仕方こそ、身体図式が準備しているもの（田中，2009，p. 9）」であると田中はいう。鉄棒で「クルッと回る瞬間は、田中がいうところの身体図式が準備していたコーディネーションの仕方が、「生理的＝客観的身体」とうまく重なり合い（一致し）、同調した瞬間であると考えられることができる。先にあげたバットニングの例においても、「他者の身体」やボールとの同調だけではボールを打つことはできない。「ボールを打つ」という行動は、「他者の身体」とボールとの同調と同時に、それを志向した身体図式と自己の「身体

(生理的＝客観的身体)」とが同調（一致）することで、実際に行うことができるのである^{注13)}。

4. 「スポーツ運動」において生起する「溶解体験」と生成する意味

本研究は次に、「スポーツ運動」において生起する「溶解体験」とは何であるかをベイトソンの三重のサイバネティックモデルに基づいて検討する。そして「スポーツ運動」における身体図式と同調は「溶解体験」を生起させることを論じ、最終的にそこにおいて生成する意味を論じる。

1) 三重のシステムと「溶解体験」

矢野は「溶解体験」を「自己と世界とを隔てている境界が溶解する」体験であり、それによって「深い連続性の次元を生きることができる」（矢野，2000，pp. 24-55）と述べている。久保は、この矢野のいう「溶解体験」とその意味生成を「エコ・システム」を媒介とした新たな個人の再生とし、ベイトソンの三重のサイバネティックモデルに基づいた亀山の理論を用いて説明している（久保，2009b）。ここでは、これらの論議に基づいて、「スポーツ運動」において生起する「溶解体験」とはどのような体験なのかについて論考を進める。

この三重のシステムとは、ベイトソンによれば「個々の人間」「社会システム」「生態システム」である（ベイトソン，2000）。亀山はそれを「個のシステム（Ⅰ）」、それから形成される「社会システム（Ⅱ）」、それらを包摂する「エコ・システム（Ⅲ）」とする（亀山，1999，pp. 71-72）。「個のシステム（Ⅰ）」とは身体として生きている人間の生体システムである。その「個のシステム（Ⅰ）」は人間によって作られた「社会システム（Ⅱ）」によって調節される（社会化）。しかしながら「個のシステム（Ⅰ）」は、社会の外部に位置する「エコ・システム（自然）（Ⅲ）」とも結びついている。そしてこの「エコ・システム（Ⅲ）」を媒介することによって社会関係がいったん解体される。亀山は「自己が現にある自己を超えて、

さらに新たに創造されるためには、私たちはエコシステムのうちに自己を溶解させて再生させる必要がある」と述べている（亀山，1999，pp. 74-75）。また久保は「スポーツ運動」体験に重層性があることを指摘し、「スポーツ運動」そのものの、言葉では表しきれない体験が意味生成の体験であるという（久保，2009b，p. 189）。また久保は「泳ぐ」という「スポーツ運動」を例にあげ、その体験の意味は「自らの身体とそれを取り囲む水、その同じ水の中にその時ある事物や他者との関係のなかに存在するということ」にあり、そのとき「わたし＝身体」は「社会システム（Ⅱ）」を超えたところの「エコ・システム（Ⅲ）」において存在しているのであり、それが身体の意味ある体験となると述べている（久保，2006，pp. 5-6）。これら、ベイトソンの三重のサイバネティックモデルに基づいた亀山と久保の論議を踏まえば、「溶解体験」とは以下のように図示される。

我々は「身体」として「世界」の中に生きている。よって先の「個のシステム（Ⅰ）」は「身体システム（Ⅰ）」と言い換えていだろう。亀山が、「われわれの自己は常に意識可能であるわけではなく、その一部は無意識下に沈んでいる。また自己システムを包むエコシステムそれ自体も多くは無意識下にある（亀山，1988，p. 244）」というように、「身体システム（Ⅰ）」の無意識の領域、湯浅のいう「基底構造」は無意識下において「エコ・システム（Ⅲ）」と接している^{注14)}。通常、我々は「身体システム（Ⅰ）」の「表層的構造」の「意識」を中心として「社会システム（Ⅱ）」を巡回している。しかし、「社会システム（Ⅱ）」のなかで調節され、拘束されていた「身体システム（Ⅰ）」はその無意識のレベルにおいて「エコ・システム（Ⅲ）」へ超越し、そのとき生起する「私と世界との間の境界線が消えていく」体験が「溶解体験」と呼ばれるものなのである^{注15)}。

2) 「身体図式」の同調的感応と「溶解体験」

第3章において、「スポーツ運動」の実践には、意識（知覚）に先立った身体の行動を志向した身体図式が身体の「基底構造」において存在し、

それが「他者の身体」、「もの」あるいは「自己の身体」と同調的に感應すると論じた。では、この身体図式と同調と「スポーツ運動」において生起する「溶解体験」とはどのような関連があるのだろうか。

先のテニスのラリーの例において「その最中に特別な高揚感を感じることがある。外の世界は消え失せ、対戦相手とボール、そして自分自身の身体が織りなす特別な世界に入り込む」と記述した。このような事態は「スポーツ運動」の実践においてよく見られるものであり、その時、そのことだけに没頭し時間を忘れ、ある種の快感を感じる。それが「スポーツ運動」において生起した「溶解体験」であるということができる。しかしながらそれは、ラリーが続いたという「達成感」によるものではない。

宮原は「美的体験」を考察するための概念図式として、「生理的快」「観念的快」「感性的快」の3つの快感を分類している。宮原によれば「生理的快」とは「きもちいい」というような生理感覚上の私的な私の快感である。「観念的快」とは一般的な社会通念に照らして「善い」「適切である」「評価が高い」とみなされることにともなう公的な私の快感である。そして、美がもたらす快が「感性的快」であり、宮原は音楽に共振し「美しい」と感じた自らの体験を例にあげ、感動体験に見られるような、私的でも公的でもない「共的な私」が感じる、「美しい」「共振する」と表現される「感性的快」こそが美的体験をもたらすと述べている（宮原・藤阪，2012）。この宮原の快感の分類に従えば、「ラリーが続いたという達成感」は「観念的快」に位置づけることができる。つまり、テニスにおいて公的な私としてのプレイヤーにとって、ラリーを続けられること（互いにミスをしていない）は、スポーツにおいて一般的に「適切」「善い」ことであり「評価が高い」ことになる。それを成し遂げたが故に「観念的快」を感じるのである。これは先の三重のサイバネティックモデルの「社会システム（Ⅱ）」においての出来事と考えることができる。

よって、このラリーにおいて生起した「特別な

高揚感」を伴った「溶解体験」は、「ラリーが続いた」という結果（「観念的快」）によって生起したものではない。それは、互いの身体図式の無意識のレベルにおける同調がもたらした「感性的快」（「きもちいい」という生理感覚上の快の延長線上にこの「感性的快」を位置づけることも可能であるが、ここでは論じない）であり、スポーツの美的体験であると考えることができる。つまり、「身体システム（Ⅰ）」の無意識の領域（湯浅の「基底的構造」）は「エコ・システム（Ⅲ）」と接しているのであり、ラリーの最中において身体図式が「他者の身体」、「もの（ボール）」、そして志向された行動を生み出す「自己の身体」と同調することによって「エコ・システム（Ⅲ）」へ超越したと考えるのである。そしてそれが、宮原のいうところの「共的な私」が感じる、「美しい」「共振する」と表現されるような「感性的快」を生み出し、感動体験、美的体験をもたらすのである。

この事態は、身体図式が「他者の身体」、「もの」、そして「自己の身体」と同調することによって、作田のいう「対象中心性」が生起したものと解釈することができる。作田はシャハテルの「対象中心性」という概念を「客体への純粋な関心」とし、対象中心的な関心は対象の全体的知覚^{注16)}を引き起こし、それとともに自己と対象との「溶解体験」が生起するとしている（作田，1993，p. 88）。対象中心的な関心は「功利主義的関心を超える対象への深い関心」であり、それによって生起する対象中心的知覚によって主体は対象と1つになると作田はいう（作田，1993，p. 91）。「功利的関心」は「社会システム（Ⅱ）」において支配的なものであり、客体は利用し、操作する道具的对象となる。しかしながら「スポーツ運動」の最中に、「ああ」とか「おお」としか表現できない「特別な高揚感」を伴った瞬間が訪れることがある。「ラリーが続く」最中に生起する、勝敗やストロークの結果への功利的関心を超えた「ボールを打つ」ことに集中した、まさに「無心」といわれるような状態である。それが「対象中心性」であり、それとともに、自己と世界との境界

が消失し、「溶解体験」が生起するのである。

笠原らは、身体表現ワークショップにおける事例研究において、音や相手の動きに感応する様子を「自分の無意識の動きや相互の無意識の動きを感じ取り、瞬間的にそれに感応して動きを返すような相互の関わり合いがダンスを生み出した」と分析し、それは「無意識レベルでのコミュニケーションが相互意図を醸し出す状態」であり、「非意図的だが瞬間連続的にコミュニケーションが成り立っている」ように見えたと述べている。また相互に独立しつつもシンクロして踊っている状況を、「その時、『私』と『あなた』は主客の隔たりと距離感が喪失する『溶解体験』とも言うべき状態に至った」と述べている(笠原・山本, 2013)。この事例も、無意識のレベルの身体図式がシンクロ(同調)し合うところに生起した「対象中心性」によってもたらされた「溶解体験」であると考えることができる。

市川は(文学や演劇の言語の呪術性への言及であるが)「同調的感応ないし模倣(ミメシス)をとおして、とどこおった感情の瀉出(カタルシス)をもたらしと同時に、最良の場合には、存在レベルが高まる浄化(カタルシス)の体験を与えるのである(市川, 1986, p. 285)」と述べている。「スポーツ運動」の様々な実践においても、このような「浄化(カタルシス)」を体験することがある。例えば、バレーボールで「レシーブ」―「トス」―「スパイク」、それに対しての対戦相手の「レシーブ」―「トス」―「スパイク」、その攻防が瞬間連続的に続いていくとき、プレイに集中しながらも何か清々しい気分になることがある。それは先に述べたように、「スポーツ運動」実践者の無意識のレベルの身体図式が、「他者の身体」、「もの(ボール)」,そして「自己の身体」と同調することによって「社会システム(Ⅱ)」から「エコ・システム(Ⅲ)」へ超越し、それによって生起した「溶解体験」であると考えることができる。

亀山は、「エコ・システム(Ⅲ)」を巡回することによって、自己システムの一部が修正されより高い統合がもたらされると述べ、「これをリニア

ルな言い方(精神分析)で言いかえるなら、意識から隠されている無意識的なものを、自我が自らのうちに組み入れることを通して、自我の構造は修正を受け、この結果、自我は統合の程度を高め、パーソナリティ全体の安定が獲得される(亀山, 1988, p. 249)」と述べる。このことは市川の述べた同調的感応によって生じる「存在レベルが高まる浄化(カタルシス)の体験」と共通点がある。そして亀山は、先の三重のサイバネティックスモデルにおいて「部分システムが全体システムを介することにより修正と統合を得るという図式は、M・ブーバーが言う『我―それ』関係が、『我―汝』関係に向かって開かれる、ということと同義である(亀山, 1988, p. 249)」というのである^{注17)}。

本研究は次に、この亀山によって示唆されたブーバーの「我―汝」関係を手掛かりに「スポーツ運動」体験が意味を生成する構造と生成する「意味」を考察する。

3) 「世界」との関係性の変容

ブーバーは人間が語り得る根源語として「我―汝(Ich―Du)」と「我―それ(Ich―Es)」の2つをあげ、「我それ自体というものは存在しない、存在するのはただ根源語・我―汝における我と、根源語・我―それにおける我だけである」と述べる(ブーバー, 1978, pp. 5-6)。「人間は世界を経験する」が、経験するものは「或るものにすぎない」。その「経験の対象としての世界は、根源語・我―それに属して」いるが、「根源語・我―汝は、関係の世界をうち立てる」とブーバーはいう(ブーバー, 1978, pp. 8-9)。ブーバーは「それ」を「彼」「彼女」と置き換えても意味することは変わりはない(ブーバー, 1978, p. 5)と述べており、「それ」とは物質のみを指しているのではない。「人間は汝とのかかわりにおいて我となる(ブーバー, 1978, p. 40)」のであり、「根源語・我―それにおける我は個我として発現し、自己を(経験と利用との)主体として意識する。根源語・我―汝における我は人格として発現し、自己を(従属的な属格を持たぬ)主体性とし

て意識する（ブーバー、1978, p. 84）」という。

この「我—汝における我」とはどのようなものであるのか。山口は、「我—それ」関係においての自我が「自然、人間、精神という『汝』に全身全霊で向かうことを通して、その自我中心性を消失」し、「我—汝」関係における「人格としての我」を生きることになるという（山口、2005, p. 386）。さらに大乘仏教における「無我」「無心」と「我—汝」関係との共通性を指摘し、「人間が集中してその人の全体が注ぎ込まれ、その事柄とまったく一つになるということ」を通して「自我主観を中心に考える自己中心化」が克服されるとしている（山口、2005, p. 387）。この山口の「自我中心性」「自己中心化」の克服は、「溶解体験」を生起させる作田の「対象中心性」と符合する点がある。先に述べたように「対象中心性」とは「客体への純粋な関心」であり、それによって引き起こされる対象の全体的知覚とともに自己と対象との「溶解体験」が生起するものであった。その一体化は自己の対象への埋没ではなく、「主体は客体との関係をつうじて高揚した生命感を経験（作田、1993, p. 92）」し、自己の存在を確認すると作田はいう。まさにこれが亀山のいう『「我—汝」関係に向かって開かれる」という事態であり、そこに「人格としての我」が出現する。

我々は通常、「社会システム（Ⅱ）」の中で、「他者（もの、自己の身体）」を「それ」として関係づけている。そして「それ」は自己が経験し、利用すべきものとなる。「スポーツ運動」の実践においても、対戦相手はスポーツのルールに基づいて、倒すべき敵であり、同時にボールも自らの身体も利用（操作）の対象であり「それ」である。そこでは「我—それ」関係において「我」が成立している。しかしながら、無意識のレベルにおける身体図式の、「それ」との同調によってその関係性を変貌させることがある。「スポーツ運動」の実践において、「ああ」とか「おお」としか言えない瞬間、特別な高揚感の瞬間連続的な高まりが訪れる。試合の勝敗などの功利主義的関心は消え去り、まさに「無我」「無心」で「スポーツ運動」それ自体へと没入する。その時、「対象中心

性」が生じ、「自己中心化」が消滅し、「主客未分」の状態が訪れる。それは「社会システム（Ⅱ）」から「エコ・システム（Ⅲ）」への超越であり、それが「自己と世界とを隔てている境界が溶解する（矢野）」、あるいは「エコシステムへの溶解（亀山）」という体験なのである。そしてその時、単なる利用（操作）の対象であった「それ」は、ともにその瞬間を生きる「汝」となる。ここにおいて「我—それ」関係が「我—汝」関係へと変容し、そしてその関係の変容が、ブーバーのいうように「我」の在り方を変えるのである。笠原のいう「その時、『私』と『あなた』は主客の隔たりと距離感が喪失する」という事態、あるいは宮原らのいう「共的な私」という存在は、「我—それ」関係が「我—汝」関係へと変容することでもたらされた新たな「世界との関係性」であり、その関係性において出現する新たな「我」である。そしてこの新たな「我」こそが「スポーツ運動」によって生成される意味なのである。

5. 結 論

本研究は「スポーツ運動」において生起する「溶解体験」とは何であるかを明らかにし、そして、「スポーツ運動」体験がどのようにして意味の生成へとつながっていくのか、その構造を明らかにすることを試みたものである。そのために湯浅の「身体論」を取り上げ、その身体の「無意識」の領域において、何らかの運動性の図式が存在することを指摘し、それを「身体図式」と呼ぶこととした。その「身体図式」は「スポーツ運動」の実践において、「意識に先立つ無意識的なはたらき」をなし、「他者の身体」、ボールなどの「もの」、そして「自己の身体」と同調的に感応（共鳴）している。それによって多くの「スポーツ運動」が成立しているのである。

「スポーツ運動」において生起する「溶解体験」とはベイトソンの三重のサイバネティックモデルに基づけば、「社会システム」から「エコ・システム」への超越として考えることができる。通常、我々は「意識」を中心として「社会システム」

を巡回している。しかし「スポーツ運動」の実践において、その「身体図式」の同調的感応によって、作田のいう「対象中心性」が生起し、「無意識」のレベルにおいて「エコ・システム」への超越がなされるのである。それが、自己と世界との境界が消失する「溶解体験」である。「社会システム」から「エコ・システム」への超越、そこでは「世界」との関係性が変容する。対象への功利主義的関心から対象への深い関心への変容である。それは、M・ブーバーのいう「我—それ」関係から「我—汝」関係への変容であり、それによって自己の在り方が変わるのである。

本研究は、この『身体図式』の同調的感応—『エコ・システム』への超越—「自己の変容」が、「スポーツ運動」体験が意味を生成する構造（仕組み）であると考ええるものである。そして、この「自己の変容」とは、「社会システム」の中で客体を利用（操作）すべき「それ」と見ていた「我」から、客体を「汝」として純粋な関心をもって接する「我」への変容である。この新たな「我」の出現こそが「スポーツ運動」の体験によって生成する意味なのである。

付記

本研究は平成25年度—27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C）：課題番号25350733）を受けて行われたものである。

注

注 1) 体育・スポーツ研究の領域における身体運動の意味生成論に関連する先行研究として、以下のものがあげられる。深澤らは、「溶解体験」に類似する「拡大体験」という概念に注目し、身体運動を介したコミュニケーションによって社会的態度の育成が進む基礎があるとその意味生成を論じている（深澤・石垣, 2010）。さらに石垣は、スポーツにおける「身体的経験」を検討し、そこに「間身体的われわれ」が成立することを論究し、間身体性の教育としての体育を模索している（石垣, 2014）。また高橋は、デュエイの経験概念の再評価の試みにおいて意味生成の体験に触れており（高橋, 2011）、森田は体育の新

しい可能性を模索していく中で意味生成の体験を論じている（森田, 2014）。

注 2) 湯浅の「身体論」に関しては「身体—東洋の身体論の試み—（1977）創文社」および「気・修行・身体（1986）平河出版社」を中心に検討する。その他、参照する湯浅の論述に関しては末尾の文献を参照されたい。

注 3) ベルクソンは失語症の事例を取り上げ、「運動図式」は「意識の中で、生まれつつある筋肉感覚の形で展開されるだろう」と述べる。そして体操の学習の例をあげ、その運動は、多数の筋肉収縮や緊張から構成され、それについての意識自体が「諸関節の多彩な動きから生じる多くの感覚を含んでいる」という。よって、「（体操の：引用者）イメージを模倣する漠然とした運動は、すでにその運動の潜在的な分解」であり、「それは、みずからのうちに、いわば分解されるのに必要なものを含んでいる」と述べる。それ故に、反復練習は「最初に内包されていたものを引き出し（傍点：引用者）」、諸運動の各々に「自律性」を与え、また「他の諸運動との連帯」を維持するものであるという。そしてそれによって「身体の知性に語りかけ」、「身体にとって本質的なものを際立たせ」、「内的な構造を標示している数々の線の一つ一つ再び見出す」とベルクソンはいう（ベルクソン, 2007）。

注 4) 山口が無意識の働きを説明する際に例としてあげた、「自分めがけて飛んでくる洋弓の矢がスローモーションのようにゆっくりと見えた」という事故に遭遇したショップの店員の話は、久保がスポーツ運動体験の時間性を検討する際に取り上げた「至高体験」や「フロー体験」において見られる「ボールが止まって見えたり、相手選手の動きがスローモーションのように見えたりする」という現象（久保, 2013, pp. 249–250）との共通性が認められる。

注 5) 野球のピッチングだけでなく、テニスの200 kmを超えるサービスにおいても、その打つ瞬間を知覚した時にはボールは既に通過している。このような高度なレベルでなくとも、例えばテニスの一般愛好家（男子）のサービスの平均120 kmのスピード（神和住, 2006）としても、0.5秒後には既にネットを通過しているのであり、知覚してから動作では返球することは困難である。このように「スポーツ運動」の実践において「0.5秒」は大きな値であり、意識（知覚）に先立つものの働きを想定しないと説明ができない現象が多いと考えられる。

注 6) この市川のいう身体図式は、メルロー・ポンティの身体図式を直接的に示すものではない。市川は

身体図式を「精神医学では、身体像、あるいは身体像をささえている意識下の体制について用いられることば」とし、ここでは「感覚―運動図式」と「観念―運動図式」が交叉・融合しつつ形づくられる生きられる身体の体制という、拡張した意味で用いるとしている（市川, 1986, p. 279）。

注 7) 市川の示した5つのタイプの概要は以下の通りである。

①協調型：aの演奏中にそれに同調し、潜在的にデッサンしていたbは途中から演奏に入る。aはbとの合奏の後、ぬけて潜在的にbの演奏をデッサンする（かけ合い演奏・ダンス）。

②誘導型：aのパフォーマンスをbは潜在的にデッサンする。aがやめたところでbがそれに代わりaは潜在的な同調に入るが、bの転調にひかれてaは同型的に同調してしまう。しかしaは突然、誘導し、bはそれに同型的に同調する（かけ合いアドリブ演奏・即興のペアダンス）。

③対応型：aに対しbは潜在的に感応し、途中から応答的同調したパフォーマンスに入る。aとbは互いに相手のパフォーマンスを潜在的にデッサンしつつそれに応答するパフォーマンスを現実化する（チーム・スポーツ）。

④フェイント型：aとbは互いに対抗しつつ対応的・役割的同調を行っているが、aの予想外の行動に誘導され、bはみせかけの動作に対応的同調してしまう（スポーツのフェイント）。

⑤自壊型：aは対応しているとみせながら相手bの身体図式に入り込み、わずかに方向を変える。bは図式の支点を外され自壊する（体術の技）。

注 8) 作田は「個人の所属集団との一体化による自己拡大感」と「自己と外界とのあいだの障壁の消失」は異なり、それ故に「拡大体験に対して溶解体験と名づけた」と述べている（作田, 1993, p. 111）。また矢野は「溶解体験」を「自己と世界との境界が溶解する体験」とし、「自己がグループや共同体」に拡大する「拡大体験」とは異なり、「この二つの体験を分けることは、超越の体験を区別するうえで重要な課題である」と述べている。そして、「拡大体験では、自己がどこまでも拡大されても、『わたし』が『わたしたち』となるだけで、自己と世界との境界は存続し続ける」とその違いを示している（矢野, 2000, pp. 53-54）。

注 9) 玉地らはメルロー・ポンティの「実存のリズム」に関する記述と「自身を同調（同期）させる（se synchronizer）」という表現（竹内芳郎ほか訳「知覚の現象学」では「共時化」と訳されている：メルロー・

ポンティ, 1967b)に注目し、理学療法の立場から、パーキンソン病を例として検討を加えている。それによれば、スムーズに歩行のできないパーキンソン病の人に対して理学療法士は、ともに動き、横で歌を歌ったり、指を鳴らしたりすることによって、その身体を介した交流を行うという。そして、ともに動くことが成立する瞬間に実存のリズムが浮かび上がり、「身体のあいだで何らかの同調が生みだされるときに、はじめてともに動くことが可能となる」（玉地・本間, 2007）と述べている。この時、同調するものは一体何であろうか。玉地らは身体図式には触れてはいないが、リズムを介しての身体図式の「他者」への同調的感応（応答的同調）とみることができるのではないだろうか。この「リズム」に関しては、作田も「溶解体験」のメカニズムに関連があることを示唆している（作田, 1995, pp. 177-183）。また金子の「動感メロディー」という考え方（金子, 2005）にも共通点が認められる。これらの見解は非常に興味深い問題であるが、今回の研究では検討の対象とはしない。

注10) 田中は「優れたバッターは、バットの先端や表面にまで研ぎ澄まされた感覚を持っていて、ボールがバットに当たった瞬間にヒットかどうか感じ分けられるだろう」と述べ、身体図式は「道具を心理的身体に包摂し、道具の先端まで身体感覚を延長する」としている（田中, 2009, p. 11）。あるいは市川は、道具の使用に言及し、熟練した外科医の感覚は使用するゾンデの先まで伸びていくという例をあげ、「物とのかかわりで拡大する身体」を指摘している（市川, 1984, p. 156）。このように身体図式は「道具（もの）」へと拡大し、それと一体化する。しかしながら身体図式は、同時に「もの」と同調すると考えられる。例えばジャグリングの名手の動きは、その身体図式がボールまで拡大しているというよりもボールと同調し、一体化していると考えることができる。あるいはスキーヤーの身体図式は、スキー板の滑走面まで拡大しそこで雪面を感じるが、それと同時に雪面の起伏に同調しターンを決めていく。野球のバッターの身体図式もバットの先まで拡大すると同時にボールと同調している。市川は、「からだの外まで広がる身体図式」の例として、車の運転においてカーブに入るときに遠心力に抵抗して逆の方向に身を傾けるという事例を取り上げ、「われわれの生き身は、カーブに入る以前からカーブまで伸びている（市川, 1984, p. 154）」としているが、これもカーブに対する身体図式の同調として考えることもできる。

注11) 例えば、新たな「スポーツ運動」の習得に取り組む初心者は「ぎこちない」動きをする。それはその「スポーツ運動」の身体図式が未だ十分に成立していないからである。しかしながら、身体図式が成立しているはずの熟練者においても、その「スポーツ運動」が十分にこなされないことがある。例えば体操競技の床運動において、完成していた技であるにもかかわらず、回転とひねりが十分にこなされず着地に失敗することがある。このことは身体図式が不完全であったのではなく、身体図式が十分に「自己の身体」と同調（一致）できなかったことを表しているのではないだろうか。

注12) もちろん不一致の体験も存在する。久保は「スポーツ運動」が「エロスの体験」と「タナトスの体験」の2つの体験をもたらすことを指摘している（久保，2009b, p. 191）。この「エロスの体験」が身体図式と「客観一身体」との同調（一致）である。そして同調できない（不一致）の体験が「タナトスの体験」であり、それは美的体験をもたらすものではない。

注13) 三浦は「人はなぜスポーツを観戦するのか」という問いに対して、勝敗を見極めたいと思うからではなく「人の身体の動きに同調してみたいのである」と述べ、さらに、雄大な光景に対して「身体がその光景に同調しようとするのだ」と述べる。そして、「身体もまた自然である」が故に（舞踊・遊戯・ダンス・スポーツなど）「身体演技とは自然との対話にはかならない。人はそのとき、自身の身体に、また他人の身体に全身で聞き入っているのである」としている（三浦，1999）。この三浦の前半の記述は、身体図式の同調という視点からスポーツ観戦を考察できる、非常に興味深いものであるがここでは論じない。しかし、後半の「自然との対話」「身体に聞き入る」というような記述は、「スポーツ運動」における身体図式の「もの」あるいは「自己の身体」との同調を表しているものと解釈できる。また佐々木の次の記述も同様に、身体図式の同調を示唆していると考えられる。「我々のからだは外界に瞬時に共鳴し、同期する場として、そこで原初的な記号が発生するアクションの場として、さらにはこころの世界と対話する行為的内言の要素として、記号の生成に大きくかかわっているのである（佐々木，1987, p. 163）」。

注14) 認識の原点として「からだ」を論じる佐々木は、その世界との関連を次のように述べている。「認識に向かうからだには自己と世界との境界を超え、からだを軸に両者を一体の場とする働きがある。我々とは無関係にからだの回りに広がって見えるこの世界

は、からだがそれとかかわる働きを組織する時に、自己と外界の隔たりを越え、ひとつの統一した場としての姿を現す。我々はたしかにからだを接点として空間と結んでいるのである（佐々木，1987, pp. 78-79）。あるいは田中らの次のような指摘も「身体システム（Ⅰ）」と「エコ・システム（Ⅲ）」との接点を表しているものと考えられる。「われわれは個々の出来事が起こる舞台、ないし体験世界そのものとして身体図式を体験しているのである。ここにおいて、身体とそれが参加している世界とは、身体図式を媒介として外延をまったく等しくしており、身体は皮膚によって仕切られた空間をはるかに超え出ている。いわば、生命のはたらきにおいて環境と身体とが等しく貫かれ、両者は渾然一体となっているのである（田中・湯浅，2001, p. 27）」。さらに田中らは、「身体図式はそもそも個性を超えており、他者や環境を内に含む体験世界全体の生成原理としての側面をもっている」が故に「自己の身体図式は他者や環境との相互作用に向かって開かれており、互いに影響を与え合う（田中・湯浅，2001, p. 27）」と述べている。

注15) しかしながら、「スポーツ運動」の実践における身体図式の同調が、その全てにおいて「溶解体験」をもたらすのではない。例えば「歩く」という身体運動は無意識における身体図式の働き（本研究では「身体」との同調）であるが（意識したら人間は歩けない）、「歩く」ことによって常に「溶解体験」が生起する訳ではない。「スポーツ運動」においても様々な身体図式の同調が見られるが、それもまた同様である。「スポーツ運動」における「溶解体験」は、その身体図式の同調によって生起する、瞬間的に訪れる特別な事態であろう。また、全ての「溶解体験」が「スポーツ運動」における身体図式の同調によってもたらされるものでもない。「溶解体験」を説明するために作田が取り上げた「イヨネスコの体験」の記述（作田，1993, pp. 37-40）は散歩中に突然、訪れた体験であり、また偉大な芸術作品や風景の前で「ああ」としか言えないような体験は、「スポーツ運動」体験のような身体の運動を伴ったものではない。

注16) 作田のいう「対象中心性」、それに対するとこころの「自分中心性」は客体を、自分の欲求を満たす操作の対象とし、利用可能な一側面しか知覚しないが故に「部分的」である。「対象中心性」は「自分中心性」とは異なり、このような利害を離れて、客体に純粋な関心を持つが故に「全体的」に捉えることが可能となる。その全体的知覚が生起するときに生命感が成立すると作田は述べている（作田，1995，

pp. 12-19).

注17) 湯浅は、「スポーツ運動」においてみられるような無意識のうちに身体を動かせるような状態を「心身一如」と表現し、それは西田が「純粹経験」「行為的直観」とよぶ状態と同じであるとする(湯浅, 1986, pp. 49-53)。「純粹経験」とは、西田がそれを「唯一の實在としてすべてを説明」することを試みたものであり、「経験あって個人ある」という経験を根本的なものとする考えによるものである(西田, 1950, p. 4). 西田は「経験するというのは事実其儘(そのまま)に知るの意である」とし、「純粹」とは「毫(ごう)も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいう」とする(西田, 1950, p. 15). 西田は断崖をよじ登る場合や音楽家の熟練した演奏を例にあげ、「純粹経験」における「主客未分」、注意が終始物に向けられた「主客合一」の状態を説明している(西田, 1950, p. 18). この西田の「純粹経験」を湯浅は、「自己が世界と相対する意識主体として自覚される以前に、非措定的に、言い換えれば自己が自我意識の主体であるという反省的自覚を伴うことなしに体験されているところの直接的明証性の経験(湯浅, 1977, pp. 69-70)」であると解釈する. このように「純粹経験」とは自己がものと合一する状態であり、「溶解体験」との類似性を持つものである. そして山口は、この西田の「純粹経験」はブーバーの『「我—汝—関係」とその本質を共有する」という(山口, 2012, pp. 32-33). この山口の見解は、先に示した亀山の見解と符合するのである. このような指摘から考えるに、「意識主体として自覚される以前」の体験(純粹経験)、あるいは身体図式の無意識のレベルにおける同調によって生起する「溶解体験」は自己と世界との関係性を変容させる可能性を秘めていると類推できる.

文 献

- ベイトソン, G: 佐藤良明訳(2000) 精神の生態学. 新思泉社, p. 586.
- ベルクソン, H: 合田正人訳(2007) 物質と記憶. 筑摩書房, pp. 148-149.
- ブーバー, M: 田口義弘訳(1978) 我と汝・対話. みすず書房.
- 深澤浩洋・石垣健二(2010) スポーツにおける意味生成論—拡大体験の可能性とその契機—. 体育学研究, 55(1): 97-110.
- 樋口 聡(1987) スポーツの美学. 不昧堂出版, pp. 147-150.
- 樋口 聡(1994) 遊戯する身体. 大学教育出版, p. 191.
- 市川 浩(1984) 〈身〉の構造—身体論を超えて—. 青土社, pp. 154-156.
- 市川 浩(1986) 身体芸術論—芸術の現象学のために—. 大森荘蔵編 新・岩波講座哲学9 身体 感覚精神. 岩波書店.
- 石垣健二(2014) 「身体経験」および「身体的対話」の領域: 「間身体性の教育」としての学校体育再考. 体育学研究, 59(2): 483-495.
- 亀山佳明(1988) 自己変容のコミュニケーション—G・ベイトソン・ノート. 香川大学一般教育研究, 33: 237-257.
- 亀山佳明(1999) 子どもの成長と「悪」. 香川大学教育学研究室編「教育という『物語』」. 世識書房.
- 金子明友(2005) 身体知の形成 上・下. 明和出版.
- 神和住純(2006) テニスにおけるストリングテンションとサービス速度の考察. 法政大学「小金井論集」第3: 174.
- 笠原広一・山本一成(2013) からだでつながりを感じる体験とは何か—身体表現ワークショップの考察から—. アートミーツケア. Vol. 5: 13.
- 久保正秋(2006) 「体育における人間形成」論の批判的検討5 —人間の「形成」と「生成」—. 体育哲学研究, 36: 1-7.
- 久保正秋(2009a) 「体育における人間形成」論の批判的検討6 —身体の意味ある「体験」—. 体育哲学研究, 39: 1-9.
- 久保正秋(2009b) 意味生成としての「スポーツ運動」体験の意義. 体育学研究, 54(1): 183-196.
- 久保正秋(2010) 「体育における人間形成」論の批判的検討7 —教育的身体空間と「指導者—子どもたちとの関係性」—. 体育哲学研究, 40: 1-9.
- 久保正秋(2013) 意味生成としての「スポーツ運動」体験の時間性. 体育学研究, 58(1): 243-256.
- メルロー・ポンティ: 竹内芳郎ほか訳(1967a) 知覚の現象学Ⅰ. みすず書房, pp. 173-174.
- メルロー・ポンティ: 竹内芳郎ほか訳(1967b) 知覚の現象学Ⅱ. みすず書房, p. 15.
- 三浦雅士(1999) 考える身体. NTT出版: pp. 57-65.
- 宮原浩二郎・藤阪新吾(2012) 社会美学への招待 —感性による社会探究—. ミネルヴァ書房, pp. 311-316.
- 森田 啓(2014) 「新自由主義教育を変革する体育の可能性」体育・スポーツ哲学研究, 36(1): pp. 1-12.
- 村野四郎(1939) 体操詩集. アオイ書房.
- 西田幾多郎(1950) 善の研究. 岩波書店.
- 作田啓一(1993) 生成の社会学をめざして —価値観

- と性格一。有斐閣。
- 作田啓一（1995）三次元の間人 ―生成の思想を語る―。行路社。
- 佐々木正人（1987）からだ：認識の原点。東京大学出版会。
- 佐藤義之（2014）「態勢」の哲学 ―知覚における身体と生―。勁草書房。
- 高橋 徹（2011）「経験としてのスポーツ」に関する研究：デュエイ経験概念の再評価から。体育学研究，56(2): 297-311。
- 玉地雅浩・本間直樹（2007）実存のリズムについて：メルロ＝ポンティと理学療法現場から。臨床哲学8: 3-18。
- 田中彰吾・湯浅泰雄（2001）身体図式からイマジナル・ボディへ。人体科学，10(1): 21-29。
- 田中彰吾（2009）心理的身体と身体知 ―身体図式を再考する―。人体科学，18(1): 1-12。
- 山口一郎（2005）存在から生成へ フッサル発生的現象学研究。知泉書館。
- 山口一郎（2008）身体論の再発見：西欧近・現代における身体論（科学哲学への統合）。体育哲学研究，38。
- 山口一郎（2012）国際哲学研究の課題と可能性 ―諸々の生活世界を源泉にする哲学としての国際哲学―。国際哲学研究，1: 27-33。
- 矢野智司（1999）非知の体験としての身体運動。体育原理研究，29: 108-112。
- 矢野智司（2000）自己変容という物語。金子書房。
- 湯浅泰雄（1977）身体 ―東洋の身体論の試み―。創文社。
- 湯浅泰雄（1986）気・修行・身体。平河出版社。
- 湯浅泰雄（1987）東洋の身体論と現代。体育学研究，32(1): 1-10。
- 湯浅泰雄（1990）身体論 ―東洋の心身論と現代―。講談社，p. 253。
- 湯浅泰雄（1997）宗教経験と身体。岩波書店，p. 151。
- （平成27年3月18日受付）
（平成27年9月8日受理）
- Advance Publication by J-STAGE
Published online 2015/11/2